

私の考える東部大会

私はかねてから「東部こそ春高のカラーを示す戦い」と言ってきた。全国制覇を狙う選手も、予選突破が最大目標の選手もみなが同じ目標で戦い、チーム力を結集する大事な舞台であるからだ。

全国で名を売る「勝利至上主義」という、プロのような方法をとる学校もあるだろう。

それもいいだろう。
みな「事情」というものが違うのだから。

ただそうなると入学時点でスカウトし、在学中も全国レベルの選手とそれ以外の選手とを区分けして指導せねばなるまい。実際、そうしないとインターハイ入賞者を5名くらい育成して、全国総合の常連になるのは無理だろう。

それも否定はしない。
その高校が全国総合で名を馳せる事を目標にする以上、それに値する非常なる思いと鍛錬で取り組んでいるのだから。

・・・そう、違うポリシーを批判、批評だけするのは簡単なのだが、そうあってはただの軽薄な評論になってしまう。

あくまで、春高陸上部の学生の気風と環境などを考慮した場合、私は初戦の「東部大会」こそが、最初の大目標であるのかなと思う。

そもそも春高に入学してくるのは、中学時代競技歴は何ら問われず、さらに入学後たった二年半で大学受験を目指すという微妙な生徒だ。

そんな学生が、普通に考えれば簡単に100m10秒台や幅跳び7m、円盤投げ50m、5000m14分台・・・などは現実には限りなく不可能に近かろう。

しかし、文武両立をした上で、



そこのラインにいかに近付けるか・・・の集大成の場が、東部大会なのだ。

そして次は、県大会 6 位以内を目指す。
もしかしたら・・・と想いを馳せる。

しかし「王国・埼玉」はそんなに甘くは無いのだが、
そこまでやれば十分ではないだろうか。

そして全国を狙っている仲間は、その後もより厳しい戦いに挑んでいく。

「良き青春」だと思う。

予備校的進学校では味わえない醍醐味だ。

実際に私は、自分の身の丈からしたら幅跳び 6 m 6 3 で
東部 3 位の表彰台は十分すぎるできたと思う。
高跳びも自分の身長くらいは超えたし、混成も県で 7 位に残れた。
メンバーに加えてもらえた 4 0 0 m R も
4 3 秒台で走った。(走らせてもらえた)

瀬上と関東、インターハイ合計 4 回遠征させてもらえた。

貴重な経験であった。一生の良き思い出だ。

何歳になっても、母校の仲間と集い、20年、30年前の話で飲める喜びは
お金では買えない宝物である。

診療所にも親の年齢ほどの先輩から現役までOBが尋ねてきてくださる。

だからそういった環境を、意図的に与えて下さった監督や、先輩方に感謝している。

そして自分らも後輩たちにそうしてあげるべきであると思うのだ。

最後になるが、大塚監督と江森先生には敬意の念が絶えない。
無償の苦勞なのに、生徒のために奔走している。
頭の下がる思いだ。

個々のレベルと、意識とを、よくぞここまで向上させられるものだと感心してしまう。



3年前の優勝のときは、「短距離とハードル、リレーだけで上位独占できるから勝てた」・・・と、口にする人々もいたかもしれない。

しかし、今回の勝利で、従来からきちんとした指導体系があった事の証明になったのではなかろうか。

すばらしい指導者達であるといえる。

現在の選手達は、まだ年齢的に理解はできないと思うが、充実して楽しく、そして強くしてくれる指導者の度量の深さに感謝する時期が来るだろう。

指導にあたってくださる監督達の

「私生活を削ってまでの無償の愛情」。

その本当の意味を今の選手達が理解するのは、主将・前田らが30歳になったくらいだろうか・・・(笑)

やはり時代が変わっても「赤き疾風」は止まないようだ。

筆 撮 (写真は新人大会)

37回 のもと齒科

